

一しゅんの女神様

津山市立北小学校

五年生

渡邊 健 矢

「先生、ナイスジョブ。」

と、ぼくは心の底から思った。それは、終業式の数日前にさかのぼる。

ぼくのクラスの先生は、ひんぱんに学級通信を配ってくれる。海の学習、リーダー研修、学習発表会など大きな行事があったときは、一日に複数枚を配ることもある。たくさんの写真が写っているので、ぼくのお母さんは、先生からの手紙をととても楽しみにしている。その学級通信で、先生は、二学期の成績表について書いていた。

成績表といえ、ぼくはとても苦い思い出がある。それは、一学期の成績表が悪すぎて、お母さんをおこらせたことだ。

じゅくは成績表をもらった日にやめさせられ、ゲームも取り上げられた。お姉ちゃんにもさんざんばかにされ、ぼくは悲さんだった。单身ふにん中のお父さんには、特に何も言われなかったけど、余計にこわかった。

ぼくは、二学期こそは成績アップをしないと、大変なことになると思っていた。ぼくなりには二学期はがんばったつもりだった。でも、先生が、

「成績きびしくしています。」

と言ったしゅん間に、かなり不安になった。

そんなときに、一枚の学級通信が配られたんだ。そこには、「どんな成績でも、子どもをほめてあげてください。」

と書かれていた。ぼくはこれを読んで、いつもならテーブルの上に置いている通信を、今日はわざわざお母さんの目の前に広げ、指を指しながら、

「ここを読んでみて。」

とお願した。お母さんは、うんうんとうなずいていた。これでぼくは、一安心だと思った。とうとう運命の日がやってきた。先生から、一人ずつ成績表が配られる。いよいよぼくの番だと思つと、心ぞうがドキドキする。そして成績表を見たしゅん間、

「やった、これで大じょう夫だ。」

と思った。ぼくは、気分良く家に着いた。何だか顔がニヤニヤしてきて、きっと鏡で自分の顔を見たら、あやしい人にちがいない。成績表をお母さんに見せる前に、

「おこつたらダメだよ。」

と言った。そしたら、

「それは、成績表を見てから決める。」

と、お母さんが言った。ぼくは不安になってきた。実は、一学期より成績がアップしたといっても、お母さんが求めているものではないと知っているからだ。しかも、お姉ちゃんが五年生のときと比べると、ぼくの成績は良いとは言えない。「できるお姉ちゃんをもつとつらいものがある。」と、ぼくはたびたび思う。おそろおそろお母さんに成績表を手わたした。お母さんの目が、上から下へ、下から上へと何度も移動した。目線が何度も往復したあと、何とぼくの予想をこえたひと言がかけられた。

「すごいじゃん。いいね。」

と、ニコニコしてほめてくれたのだ。いつもきびしいお母さんが、女神に見えるくらいだった。そんな上きげんのなか、お姉

ちゃんが帰宅した。相変わらず中学生になっても、バツチリの成績をとっている。しかも、一年生ですでに生徒会に入っている。しかし、ぼくの成績表を見ると、お姉ちゃんまで、

「すごいじゃん。成績上がってるね。」

と言ってくれた。ぼくはすごくうれしくなって、今ならチャンスカもと思い、お母さんに、前からほしかった任天堂スイッチを買ってほしいとお願いしてみた。ふつうならクリスマス前だし、成績もアップしたことだから買ってくれると思った。でも、やっぱりぼくのお母さんは甘くない。

「無理。」

というひと言で話は終わった。

ぼくは、残念な気持ちでいっぱいだったけど、久しぶりにほめられたし、気分も良かったのでうれしい気持ちの方が大きかった。冬休みの始まりは良い感じでスタートした。楽しい冬休みになりそうだ。